

令和6年度 第1回社会教育委員会議 議事録

日 時 令和6年7月22日(月) 10時～12時

会 場 大阪府庁本館1階 第三委員会室

出席者 岡田議長、濱元副議長、大浦委員、大谷委員、河瀬委員、久野委員、高坂委員
谷本委員、濱田委員、本田委員、山内委員

- 議 事 (1) 大阪府社会教育研究会議について
(2) 令和6年度子ども読書活動推進事業計画について
(第5次子ども読書活動推進計画策定についての事項を含む)
(3) 家庭の教育力を高めるてだてについて

<意見・質疑要旨>

◆議事(1) 大阪府社会教育研究会議について

(委員)

・学校運営協議会は、小中の枠組みを強めて、地域学校協働活動の実施を大事にしている。地域の方と共についているところを大切に、本校は、運営協議会委員のうち1名を推進員に担っていただいている。本校区の推進員は、長年、地域教育協議会の会長を務めていただいた方にそのまま入っていただいているので、地域の様々な人材の方と繋がっていただけて、どうやって一緒にやるかっていう視点でできている。しかし、本人は「年齢的に次の方を見つけてほしい」と話されている。

・資料の3点目にあるような、後継者の育成に関心がある。2点目の協働についても、今後の方向性として、学校現場も地域社会教育を担う方々も関心があると思う。

・また、高槻市内では、様々な団体の団体が立ち上げられている。例えば、子ども食堂であったり、放課後の第3の居場所だったり、不登校の傾向のある子どもをターゲットに絞って、寺子屋を進めているような団体もある。地道な取り組みが続いていくところとうまく軌道に乗るかっていうところも課題になっているので、研究大会では、様々なことを教えていただき、府内でも活動が積極的に進めばと思う。

(委員)

・地域の方が学校の教育カリキュラムに関与していき、地域が学校作りに関わっていく制度である。それと地域学校協働活動が連携しながら、地域のボランティアの方々等に、子どもたちの教育をお手伝いいただく、あるいは地域活動に学校が出ていく、あるいは地域の方が学校に入っていただくなどの展開していくものである。

・現実には、活動に参画いただく方々の固定化と高齢化というのが課題で、新しい人材が入ってきて欲しいとも育ってほしいとも思いながらも課題は多い。長く関わってくださってる方は、学校のことも地域のこともよくわかってるから、学校もそういう人材を離したくないのであるが、高齢化については課題であるということによく言われている。

・そういう意味で人材の育成や地域の中で子どもを育てていく仕組みを作っていくというのは社会教育の大きなテーマである。

(委員)

・人材育成も喫緊の課題だと考える。どこの地域も高齢化や次の担い手の育成が課題になっており、人材を見つけられていない現実がある。

・先ほど話されたようなNPOで独自で活動しておられる方などが、地域に繋がっていない可能性があると考え。

・私自身も不登校支援をしているが、親のお話の会や子どもの居場所づくりもコロナ前はほとんどなかったのが、今は増えている。現状を踏まえ、必要だと思って立ち上げた方が多くおられる。また、学校の図書館を利用したサードプレイスも増えてきている。

・様々な人材はおられるが、それが地域の様々な役をされてる方と繋がっていないのが一番の問題だと思う。資料の4番目の「NPOの活動と社会教育関係団体や行政の社会教育の取組との接続について」ということについて、話し合っていきたい。

(委員)

・人材育成、後継者育成というのは、府の社会教育と教育コミュニティ作りを持続可能なものにするためには、喫緊の課題で長く議論されている。

・社会教育士の活用は、後継者育成というところにもリンクする。資格を持っていても、その役割の認知をしてなくて、行政がうまく活用できてないという自治体も多いように思う。今まで地域活動と接点がなかった有資格者などが、積極的に活躍できる場を作っていくたり、地域学校協働活動推進員になってもらったり、コミュニティスクールのコーディネーターになってもらったりと常に活用していく必要がある。

・社会教育士は、人材育成後継者育成というところに、繋がる一助になることだと思う。また、様々な居場所でのNPO活動が増えている中で、それらと旧来のものを、学校、地域の組織っていうのがどのように繋がっていくかっていう考えていくことで、より持続可能になっていくと思う。それは、新たな人材発掘の場になっていくと思う。社会教育士やNPOとの協働というのが学ぶ意義があるテーマだと感じた。

(委員)

・社会教育主事任用資格を名乗るには、社会教育主事講習に受講する必要がある。資格を取得し働くまでを行政が進めようとするとお金も必要となるし、行政が市へ推薦して資格を取らせた限りは、その資格取得者を何らかの形で採用して雇うとなると、すぐには動けない部分もあると思う。

・社会教育人材部会では「いろんなところで社会教育の手法といったものを使って課題解決をするということは必要。」と提言している。社会教育に携わる方は、社会教育とは何なのかという基本的な認識を持った上で、社会教育の手法を使って課題解決を進めていくような人であってほしいとある。要は、社会教育というのは、自らの課題を解決していけるように支援をしていくものである。

・大阪で社会教育士を養成している大学もある。若い人たちが資格を取ってみようと思ったら、資格を持

った人が世の中で増えていくことが必要である。もっと積極的に行政がお金をかけて養成していくことはありうるが、現実的ではない。毎年たくさんの人を養成していくということは、難しいのではないか。

・NPOは社会教育活動をしてるとは必ずしも思っていない。社会教育なんて聞いたことないし知らないけれども、外から見たらまさに社会教育活動をしている方々がいる。そういうところと行政で社会教育をしている人が繋がっていくという形で「一緒にやりましょう。」と仲間を増やしていくことが、人材育成というところでは、始めやすいのではないか。それがいわゆる大阪府の教育コミュニティである。様々な教育支援に関わっている人たちが繋がっていき、学校教育も含めて、支援している人々の輪ができていくということだろう。

◆議事（２）令和６年度子ども読書活動推進事業計画について

（第５次子ども読書活動推進計画策定についての事項を含む）

（委員）

・アンケートの調査項目、重点項目で「なぜ読書をしないのか（できないのか）」とあるが、このアンケートは、子ども用の「問 11 読書をしない理由を教えてください。」だけ書いてある。「しないのか」「できないのか」と重点項目にあるが、ここは「しない」だけを書いてある。しない、できない理由もあるかもしれないので、そこは括弧して、もしくは「できない」という形でした方がよいのではないだろうか。「しない」をもう少し柔らかい表現に変えるほうがよいのでは。

・「問 14 であなたはどうすれば読書したいと思いますか。」について、「もし読むとしたらどんな本を読みたいですか。」みたいな表し方のほうが、子どもにはいいのではないだろうか。「今後、読むとしたらどんな本がいいか。」のような表し方ではどうか。

（委員）

・漫画について「カタカナとかひらがなにした方がいいのでは。」ということについては疑問が残る。

・推薦おすすめ本一覧については、リストの方がわかりやすいだろう。

・「問 14 どうすれば読書したいと思いますか。」について、「どんな本読みたいですか。」の方が確かに柔らかい印象がある

（委員）

・コミュニティスクールの学校で、地域の方たちと一緒に話し合っ、子どもの読書力を上げるにはどうしたらいいかということ、学校と地域の委員とで話し合っ出たアイデアが学級文庫である。学校に図書室はあるが、読まない子は、わざわざ図書室には行かない。しかし、学級文庫のように本が手の届くところにあれば、「ちょっと見てみようかな。」という子が増えるのではということで、学級文庫を増やす取組が始まった。手段として、本を購入する予算がないので、地域の人からの提案で「家にある小学生向きの本を寄付しましょうか。」「子どもが読んだ本を捨てずに置いてあるのがいっぱいあるよ。」となり、コミュニティスクールの取組として地域全体に広げた。それにより 1 ヶ月で寄付してくれた冊数が小学生向きの本で 1200 冊集まった。その本を綺麗にするのは運営協議会の方やボランティアさんが行ったが、何

年生にこの本という割り振りをするのは、やはり専門性のある方である必要があったので、司書や国語の先生に協力してもらい各教室に置くようになり、普段、本を手にしないう子が、読書する機会が増えた。そのような取組のように環境を整えることも一つだろう。

(委員)

- ・学級文庫の他に、学校図書館がブックトラックに本を載せて、朝の読書の時間に回る取組もある。とにかく、子どもたちの手元に届けるっていうアウトリーチ活動っていうのがある。
- ・大人用のアンケート資料5の問4について「あなたは普段ひと月あたりどれくらいの時間、読書しますか。」となっている。子ども用アンケートの方は、問4資料4の問4で「1日当たり」となっており、齟齬がある。また、子ども用のアンケートでは「1日当たり」となっており、選択肢が「2時間以上」とか「10分未満」となっている。統一した方がいいだろう。どちらの方が答えやすいか、審議された方がよいのではないか。

(委員)

- ・学校の読書環境が、子供の読書時間とか読書量に影響してるんじゃないかという前提があったのだが、特に質問書の内容で言うと、例えば「読むときにこれを調べたいから」とか「学校の中でこういう調べ学習してるから」そのための探究学習の一環として、学校図書館とか地域の図書館とかで本を借りて読んでいき、また、それを何か発表していくということも重要な読み方になるのではないだろうか。その辺りについて、この児童用質問紙の中では、あまり触れられてない。そういったこともわかるものがあつたらいいのではないか。
- ・質問だが、児童生徒を抽出する際に、何校か学校を抽出して、その学校に児童アンケートの回答を求めよう形になるのか。

(事務局)

- ・学校の負担感もあるので、調査を実施する学校は、市町村に依頼し、選択してもらおう。

(委員)

- ・読書環境や学校で授業等での取組とか、そうした条件の違いで、子どもの読書量や読書に対する意欲とか、違いがあるのかといったことが分かったほうが、支援しやすいのではないだろうか。学校の情報が得られるような仕組みもとったほうがいいのではないか。
- ・各学校も、管理・回答してもらおうようなアンケートがあり、その上で共通するような形で、子どもの読書時間等を比較してみると、成果がわかりやすいのではないだろうか。

(事務局)

- ・令和元年度では、抽出のアンケートを行い、1番2番にて10月11月にするアンケートを、その後3番から8番の全小学校中学校、市町村教育委員会や図書館にもアンケートを行う予定にしている。そこで学校の読書環境について問うような内容になっている。

(委員)

・学校別の読書環境の違いってものを、この児童生徒アンケートで、比較することはできるのか。

(事務局)

・はい。学校名は書いていただくので、学校を特定することはできる。

(委員)

・その方が、何がその読書量に成果をもたらしてるかっていうことが、わかりやすく、援助がしやすいのではないだろうか。

(事務局)

・市町村ごとに読書環境が異なる。学校司書が全配置されてるところや、あまり配置されてないところなど様々である。そのあたりも念頭に置き、検討していきたい。

(委員)

・漫画対象外ということだが、最近は漫画の図鑑なども増えてきているので、そのあたりが対象になるかっていう部分で判断が難しいと感じた。全体的に「その他」という項目に、自由記述欄があったら意見が拾いやすいと感じた。

・保護者用のアンケートの部分だが、「問 5 全く読まないを選んだ方にお聞きます。」と「問 4 ひと月あたりにどれぐらい読んでますか。」という項目も関連するが、例えば「全く読まない」と「10 分未満」など、もう少し対象を広げてもいいのではと思った。

・問 6 に関しては「ア」から「ス」の中でと書いているが、「ア」から「ソ」に修正を。

(委員)

・大阪市は、区の取組みとして、中央図書館から絵本を100冊ずつ、公立幼稚園・私立幼稚園51園に配本いただき、3ヶ月ほど貸出し期間を設けている。幼稚園にも絵本室や本棚がたくさんあり、そこから子どもたちが好きな絵本を読むという習慣もあるが、図書館にある幼稚園にもないような絵本触れるというのも一つの新しい世界を広げることに繋がっている。

・「親子で読む」「親子で見る」ということで、週1回、絵本を借りて帰って、お家で一緒に読んでもらう、触れてもらうという取組もしている。絵本カードなども作り、子どもの様子を書いてもらっている。小学校入学がスタートではなくて、もっと前段階からのスタートであるので、読書週間をこの時期に身につけさせたい。

・この調査対象について、公立・私立幼稚園も含めた方にも、アンケート等が届くのか。その内容が分かれば教えていただきたい。

(委員)

・泉大津市では、生涯学習推進計画の中で子どもの読書計画をうたっていたが、新しく図書館が整備さ

れたことで、昨年度、子どもの読書活動推進計画を作成した。通常こういうのは概要版だが、概要版ではなく、これが本編となる。当事者の子どもたちにしっかり分かってもらうために、漫画 3 ページにまとめた。

・内容について、本好きの大人がいくら考えたって、本を読まない子どもたちの気持ちには寄り添えないので「その本嫌いの君手伝ってもらえませんか」というタイトルで、「図書館行かない。」「本は読まない。」「もう言われるのも嫌だ。」っていう子たちを公園などで声をかけてきてワークショップを行った。本を読まない理由を、徹底的にワークショップの中で聞きとり、子ども向けアンケートの「問 14 どうすれば読書したいと思えますか。」というところから出た意見を抽出し、対策をこの中に盛り込んでいる。

・子どもたちの意見として「あの年齢に応じた本を読みなさいって言われるのが嫌。」だとか、中学生から「漢字が読めないから、もうそもそも嫌だ。」とか「表紙がちょっと古臭いのが嫌だ。」という意見があった。

・「子どもの読書活動推進計画」とすると、もうそれだけで子どもたちは嫌がるので、「君と読み解き」というタイトルになった。友だちと一緒に本を読んでドキドキしたいという意見をそのままタイトルにした。

・「親しみやすい表紙の本が学校に並んでたら、手に取りますか。」とか、アンケート項目をもう少し柔らかい問いかけにしてはどうだろうか。

・この子ども読書活動推進計画っていうのは環境を整備するっていうところが重要である。

(委員)

・泉大津市子ども読書活動推進計画では、「読書」という言葉は使っていない。「読む」となっている。読書の定義として「物語を読む」ことだけでなく「何かを調べる」ためにも必要である。何か調べ物をするたびに「少しここを読んだ。」というのは、「読書じゃないな。」というイメージは確かにある。読書の価値っていうのもあるだろうが、それを前面に出していくと子どもが入りにくい部分はあるだろう。

・まずは文字を嫌わないでほしい。何か調べようと思ったときに「読んでみたらわかった。」というような経験が、読書にも繋がっていくこともある。例えば、スポーツをやってる子どもたちが、上手になるためにスポーツのノウハウ本を読むこともきっかけになるだろう。ぜひ、いろんなところで取組を進めていってほしい。

◆議事（3）家庭の教育力を高めるてだてについて

(委員)

・親学習は有効な取組だと思う。ただ「参加できない」「参加する人が少ない」という課題について、開催するにあたっての人・物・場所・予算の確保というのが難しい。

・親学習リーダーだけで、地域の中で親学習を開催することは難しい。何らかの肩書きや地域コーディネーターのような地域と保護者を繋ぐような役割の人であれば、地域の団体として承諾されやすい。今後、親学習リーダーの養成をするのであれば、地域コーディネーター的な学びの研修も一緒にしてほしい。

・毎年オンラインで実施している学校もある。OYA・REN でもオンラインでワークショップ研修を数回実施した。オンラインであれば、顔を見ながら、話もできる。小さい子どもさんを連れ回さなくていいメリットもある。ただ、関係性や全く知らない人ばかりでやるのはハードルが高い。

・親学習までいかななくても、コミセンなどの空きスペースを活用したフリースペースなどで「子育てどうですか。」

みたいな話から「1回講座やってみましょうか。」みたいな繋がりがあればと思う。親学習リーダーが地域コーディネーター的な役割を担えるとよい。

・中高生とかも親学習をしているが、これから親になる世代に、学校で、親学習をやることによって「うちの地域がいいな。」と思ってもらい、一旦地域の外に出ても、戻ってきてもらえるような取組が必要である。地域のお祭りとかイベントのときに中高生が集まって、イベントと抱き合わせにして実施することなどすれば、親学習のしっかりした講座にも繋がっていくのではないだろうか。

(委員)

・富山県のPTAの協議会が、図書館で子どもを対象に経営シミュレーションゲームを毎週やっている。ソニーが開発した人材育成のゲーム版を小学校一年生や未就学の子たちと一緒に親にもやってもらっている。子どもの自主性を育てるためのゲームで、意思決定カードを引いて、自分で「売るか。買うか。人材育成するか。」っていうのを決めていくゲームである。お父さんお母さんは口を出さずに見守る役目であることを指導の方から話される。指導という形ではなく、助言をしていただくものであり、子どもがちゃんと自分の意思で決めて進めていくものである。この取組から、結果的に保護者の方のコミュニティができていった。このような取組みを、地域で開催してもらって、地域の中でまたコミュニティを作ってもらう。その人たちがまた新たな人たちを引き連れて、図書館でやってもらうと今度は校区を越えての繋がりができる。

・経営シミュレーションゲームを実践する場所が必要となり、地域の方が、土曜日、日曜日などお休みの企業の駐車場を借りて、本当のまかない的なものを仕入れて売るっていうのを子どもたちにやってもらう。それを見た商店街の方が「今度うちの空き店舗で子供たちにやらせようか。」っていう形で地域の方も巻き込んでいく。ゲームも何年もやっていると、今度子供たちの方が指導できるぐらい力がついてくるので、今、中高生の長くやってる子は別の自治体に今度は指導者として赴いている。

(委員)

・学習とか学びという少し敬遠されると思う。やはり学びが必要な方たちっていうのは、学びが嫌いな方なのだろう。できるのであればゲームや遊びとかを取り入れた方がいいと思う。ゲームや遊びは最近の研究では、すごく高く評価されており、学術研究なども進んでいるようだ。例えば、ゲームで「自主性が育つ」とか「協調性が育つ」とか「マナーが育まれる」など、いいことがたくさんある。遊びも文化であって、子どもにとっても大事なものである。子どもたちの学ぶ権利とか学習権については、いろいろ議論されるが、子どもたちの文化圏は「遊び」とか「ゆつくりする」とか「レクリエーション」とか、そのような精神的なものとか、楽しみとか、そういったことが子どもたちの権利として、注目されることがあればと思う。

・それとともに親の文化圏も大事である。そのような中で自然と学んでいくことも大事である。また、教育力の中で「繋がり」がものすごく大事だと言われており、実証研究なども行われている。最終目標は「コミュニティの形成」「繋がりと関係性」と「それをいかに作り出していくか」というところ、これらが大事なのかなと思う。

・教育力が低い地域や低い家庭は、貧困家庭やシングル家庭など、孤立されている家庭が多いので、なかなか来られる方がいらっやらない。個々でも実施しているアウトリーチが必要。こういった支援も必要だと思うが、それを個別にするのではなく、最終的には繋がれるようなアウトリーチにしていけばいいと思う。

(委員)

- ・親学習という名前がなじみにくい、親学習という言葉では参加されにくい。
- ・来ていただくために、いろいろ工夫はしているが、学校の保護者会や懇談会に行くと、学校の形態がいろいろ変わってきており、保護者が集まる機会が減っている現状がある。そこへ入り込むのも難しくはなっている。ただ、まだPTAで、〇〇子育て部みたいな部会があるところもあり、親学習を実施している。そうすると「親学習って参加してみたら、よかったわ。」って思ってくれる人がいつもいっぱいおり、その方々が学校へ持ち帰ってくださったり、他のときに機会を作ってくださいました。
- ・今年度はそこで受けてくれた人から2人と、他の1つ団体からも3人、5人の新しいメンバーを増やすことができた。
- ・ですから「動きましょう。」っていう部分が一番大事で、教育委員会が、教頭会などでご案内いただいて教頭先生たちが「いいよね。」と手を挙げてくれたところに行く。やっぱり、教育委員会と繋がりながら提案して実施することは必要だと思う。
- ・教材に掲載されているデータの情報が古い。かなり最初に作った段階のもので情報が止まっているものもある。新しく作られたものは内容が更新されているが…そういう有効な情報ももっとくださったら、より広がっていくこともあると思う。

(委員)

- ・昨年から親学習に関わらせてもらっている。東大阪市のリーダー研修会は参加者が非常に少ない状態だった。親学習リーダーを長年担ってこられた方々が高齢なのもあり、自分たちで「やってみようか」となり、東大阪から「まち作り補助金」をいただきながら、新たにグループを作って進めている。
- ・「親学習をやってみませんか」とPTAの保護者の方に声がけするだけは、名称からくるイメージもあって、あまりよい反応はないが、内容と意義を理解していただいた方からは地元の地域以外からも参加の希望がある。いろんな繋がりの中で、ここ最近では乳幼児の保育士や幼稚園の先生方に興味をもってもらい、先生方に対して親学習を開催した。今後はその保育所や幼稚園の保護者向けにも実施の要請をもらっている。乳幼児にかかわる方々の方がより問題意識というかニーズがあるのかなと感じる。

(委員)

- ・児童虐待とかを防止していくっていう観点でいうと、一番大事なのは保護者の孤立を防ぐっていうことが一番大きいかなというふうと思う。
- ・親学習という学習機会提供と、この訪問型家庭教育支援っていう個別の支援っていう部分だけではなく、より保護者の横の繋がり作りっていうことにフォーカスした取り組みやそういう援助が有効的だと思う。
- ・旧来やってきたことにプラスして、保護者の横の繋がりができるような取り組みが必要であり、学校園の活動等と合わせてやることは、一番効果的だと思う。就学前の乳幼児検診など、そうした場を利用した学習機会や、保護者同士で普段の子供の悩みなどを話しあったり、授業参観やPTAの取り組みなどの場で活用したり、取り組みやすいところで取り組んでもらうことが必要である。普遍的にみんなが参加で

きる、そのような横の繋がり作り、ネットワーク作りっていうものを、コンセプトと捉えて、位置づけていくっていうふうにしないと発展性がない。地域教育振興課の家庭教育支援として、打開策を新たなコンセプトで発掘していくということが大事である。